

# 狛江の中世墳墓

平成11年3月30日発行  
狛江市和泉本町1-1-5  
電話 (3430) 1111

## I 中世という時代

「中世」とは、歴史学で古代と近世の間にあたる時代という意味で使われる用語で、一般的には、12世紀後半から16世紀後半までの約400年ほどの時代に相当します。この時代は、それまでの支配者層であった貴族たちにかわって、武士や庶民が台頭した時代です。

これまで狛江市内では、この時代のようなことを知ることでできる資料は、板碑（供養塔として建てられた石塔）のほかにはほとんど認められませんでした。近年の遺跡の発掘調査によって発見された遺構や遺物を手がかりに、わずかにその一端をかいまみることができるようになりました。

## II 狛江市内の中世遺跡

現在、狛江市内にある中世の遺跡のうち、発掘調査によってその内容の一部がわかっているものには、和泉遺跡、古屋敷・相之原遺跡、（仮称）狛江市立第三中学校南側遺跡、埴上遺跡、三長東遺跡、田中・寺前遺跡、玉泉寺前遺跡、経塚古墳、経塚遺跡等があります。これらのほとんどは中世においては、墳墓を主体とする遺跡で（溝、竪穴状遺構等を伴う例もあるが）、土坑墓とよばれる死者を埋葬する墓坑や、地下式坑とよばれる特殊な構造の墳墓等が発見され、比較的少量ではありますが、陶磁器や銅銭といった副葬品も出土しています。

## III 土坑墓

中世における最も一般的な墳墓の形態と考えられるのが土坑墓です。具体的には、地表面から竪穴を掘り込んで、その中に死者を埋葬（木棺に入れたり、布にくるんだ可能性があるが多くの場合その痕跡は残っていない）したと推定されるものです。

狛江市内では、三長東遺跡、田中・寺前遺跡、玉泉寺前遺跡等で発見されています。三長東遺跡では、周囲に溝を廻らせた墓域内に掘り込まれた土坑墓内から、6枚の銅銭（六道銭として副葬されたと考えられるもので、このうちの1枚が1094年発行の紹聖元宝—宋銭—と判読できた）が出土し、さらに溝内からも銅銭1枚（1102年発行の崇寧通宝—宋銭—）が出土しました。田中・寺前遺跡では、30基の土坑が発見され（各土坑は規模の面で一定の格差があり、出土遺物が認められないものも多かったため、すべてが土坑墓であるとはいきれない）、このうちの数基からは陶磁器片が出土し、特に4号土坑からは銅銭1枚（1368年発行の洪武通宝—明銭—）が、13号土坑からは銅銭6枚（六道銭として副葬されたと考えられるもので、1408年発行の永楽通宝—明銭—）が出土しました。

## IV 地下式坑

地下式坑は地下式横穴墳ともよばれるもので、武蔵・相模一帯と下総・甲斐の一部地域に認められる、中世の（まれに古代末期や近世初期のものと考えられる例もあるが）墳墓と考えられる遺構です。その多くは副葬品も少なく人骨の遺存状態も悪いのですが、神奈川県秦野市東田原中丸遺跡等で人骨の存在が確認されています。形態的には、地表面から竪穴を掘りその下部をさらに横方向に掘り込んで、死者を埋葬する墓室としたものです。

狛江市内では、和泉遺跡で1基、古屋敷・相之原遺跡で1基、（仮称）狛江市立第三中学校南側遺跡で3基、塚上遺跡で4基、田中・寺前遺跡で2基、玉泉寺前遺跡で6基が発見されています。特に塚上遺跡で、1号地下式坑から銅銭2枚（このうちの1枚が1056年発行の嘉祐元宝—宋銭—と判読できた）が、2号地下式坑から銅銭1枚（1056年発行の嘉祐元宝）が、3号地下式坑から羽釜が出土したことや、（仮称）狛江市立第三中学校南側遺跡で、1号地下式坑からカワラケ5枚（死者への供え物や灯明をあげるために使用したと推定される15世紀後半から16世紀前半頃の土師質土器の小皿）が出土したことは注目されます。

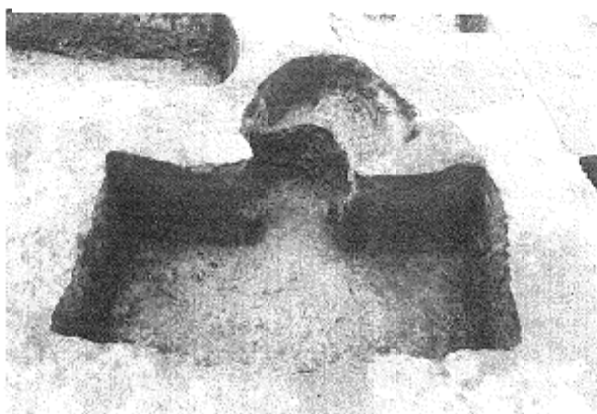
また、和泉遺跡、（仮称）狛江市立第三中学校南側遺跡、田中・寺前遺跡、玉泉寺前遺跡で、同時代の竪穴状遺構や、居館跡に伴うと推定される大規模な溝が地下式坑とセットになるようなかたちで発見されたこと、付近から、銅銭・中国製陶磁器・羽釜・天目茶碗・天目台といった有力者の存在を示す遺物が出土したことは、興味深い事実です。

## V その他の中世墳墓

これらの墳墓のほかにも狛江市内には、経塚古墳に中世墳墓が認められます。経塚古墳は、本来は古墳時代中期（5世紀後半頃）の円墳として築造されたものですが、中世墳墓として再利用されたと考えられます。かつて墳頂部には数多くの板碑が建てられていたことが確認されており（18基以上と推定される）、墳丘からは遺骨や遺灰を埋納するための容器である骨蔵器が出土していること（13世紀前半頃の常滑焼三筋壺及び14世紀頃の古瀬戸焼瓶子）が、これを証明しています。また、周辺一帯にひろがる経塚遺跡からは、経塚古墳（中世墳墓）の東側に隣接するように、霊廟や礼拝施設の可能性が考えられる建物跡が発見されています。

これまでみてきたように狛江市内の中世の墳墓は、かなり数多く存在することがわかってきました。しかも市内各所で認められます。このことから考えると、中世においても、これまでの予想以上に多くの人々が居住していたことが想像されます。また、いくつかの遺跡で、大規模な溝や竪穴状遺構等が伴う例が認められることや、銅銭・中国製陶磁器・天目茶碗・天目台等の遺物が出土したことから、有力な豪族の居館跡が存在したらしいことも、想定されるようになりました。残念ながら現段階では、そのような居館跡そのものはまだ発見されていませんが、必ずや将来発見されることでしょう。

ともあれ中世の遺跡についての研究はまだはじまったばかりです。今後の研究の進展と調査成果の蓄積によって、さらに多くの事実が明らかになってくるはずです。



地下式坑（田中・寺前遺跡）



地下式坑（塚上遺跡）